

振り解いたつもりなのがむしろ振り落とされたかにも思われた。英一は薄明るい廊下に転がっていた。城の廊下、一階の東側だろうか。……まだ彼の心臓はばくばくと音を立てていて、その心には恐怖が染み込んでいてまともに立てる様には思われなかった。へなりと尻餅を着いた姿勢で上体を起こし、それで辺りを見回し、何はなくとも壁際に寄り掛かってやるのが精一杯だった。英一のその心には緊張が抜けて行くと共にじわじわと、染み渡るような悔恨が黒々と広がっていくのがありありと分かった。自分は慎一郎を、友達を救えなかった。むしろ、止めを差してしまったに等しい行いをしたのだと。そこに如何なる不可抗力が伴っていたとしても最後の一押しを知らずして務めてしまったと云う事実は彼に暗澹と絶望を膨れ上がらせ、それが深々とした無氣力を心中に沸き立たせた。ただ、安心していたいと云うしかない。彼は古びた城郭の手入れもされていない天井を茫然と見上げ、無駄な時間を過ごした。……だがそんな贅沢もまた、いつまでも許される筈がないことを英一はどことなく予見していたものだった。これにもまた目を逸らし、やがてはそれが自らの前に立ち塞がり、己を締め上げることを待ちたがったとさえ言えるのかもしれない。

「……!!」

英一はびくりと震えた。周囲の空気が嫌なものに変わって行く。すぐ近くに何か化け物が現れた。捕まれば命はない怪物が。それを知覚し、自らが怯え震え上がったことを認識した彼は半ば本能的に立ち上がった。立ち上がってやつと、自らがまだ死にたくない、生きたいと切望していることを理解した。英一は周囲を見回し、禍々しい気配が西から北の廊下を回って近付きつつあることを理解した。またそれとは別に、彼の視界に急いで駆ける別の人間の姿が現れた。それは累だった。二人は互いを見て一瞬驚いたが、向こうに留まっている余裕はないことを英一は直ちに理解して今自分に最も近い扉のノブに手を伸ばした。開く。彼は直ぐにこれを開き、累を顧みて半身だけその中に入って彼女に來るよう身振りで促した。累は僅かに躊躇いを示す顔を見せたがすぐにそれを捨て、速やかに廊下を駆け抜けて英一の元へ飛び込んだ。英一は直ちに累を部屋に押し込んで扉を閉め、鍵を掛けた。扉を背中にしながらか彼は累を見る。慌てて走り抜けたために息は荒いが、これと云って外傷らしい外傷は見られない。二人はお喋り一つが命取りになることを理解していたので危機が去るまで何も口には構えなかった。ただお互いの視線が互いを真実その人、見知ったその人であることを確かめようと凝視し合っていた。

「はあっ、はあっ……!!」

別の声と足音が近付いた。それは常人のものだった。本来の彼ならもっと速く走れるはずだがその荒い息遣いからして怪我をしているのかもしなかった。彼は東側の廊下の扉を一つ一つ手あたり次第開こうとしたがそのどれも、誰が鍵を掛けたとも知れぬ様に開かなかったのが聞こえた。そうして常人は二人の籠る部屋の前まで来た。ふとそこで英一は自分たちが立て籠もっているのはその狭さとぽつんと開いた底知れぬ穴からトイレらしいことに気付いた。ガチャガチャとノブを回す音がしたが開かない。その後ろから追跡者の足音が近付いている。

「開かねえっ、開けよ、いや開けろよ、いるのは分かっただぞ!？」

扉の向こうから常人が糾弾する声が上がリ、累が声なくびくりと怯えた。扉を背にして彼が開けようとする動作を感じ取る英一はその必死さからまた恐怖を思い抱き一度扉の側を見て、累にまた視線を投げ掛けた。累は何も答えなかった。英一が独断で開こうかと思っただが、近づく足音が彼を捉えたらしくどつと速くなる。不吉な女の笑い声が廊下に響いた。それに気付いた常人は怯えの声を上げ、齧り付いていたトイレの扉から離れて駆け出した。しかし英一の記憶が正しければ、東から西への廊下は瓦礫が崩れ落ちていて到底通れない。東側の詰所は開かれた試しもない。常人は逃げ場を残していないだろう。

「ヒッ、や、やめろお、オレは、オレあ死にたくねえっ！！ 生きて帰りてえよお！！」

常人に怪物の手が掛かったのがその音から二人にも感じられた。まず最初に、めきりと何かを折る音がした。激痛にのたうち回る常人の喘ぎが続いて彼が廊下に転がるのが分かった。それからすぐには追撃がなかった。代わりに何故か服を破く音がした。暫く常人が苦悶の様な喘ぎと不審な音、どこか打ち付けるような奇妙な音が繰り返され、終いに常人が文字通り果てた様に硬い声を上げた。それからすぐ、どすりと何かを肉に突き刺すような音がし、めきり、ぐちゃりと云った耳を塞いでなお届く忌まわしい響きをなす音が幾度も二人に聞かれた。扉越しのくぐもった音はただ忌まわしきだけを二人に与え、そこで何が起こったかの想像を膨らませる余裕を与えなかった。……やがて音が絶えた。それからずっと何かが立ち上がる音がし、しかしその主が突如耳障りな甲高い哄笑をしたかと思うとそれがふっと立ち消え、それまで周囲に立ち込めていた異様な雰囲気は徐々に霧散していった。全てが終わったと考えても英一と累の二人は暫く動こうと云う気になれなかった。どちらにとっても今そこで起こったことは想像したくもなく、また新しい犠牲者が出たと云う事実を確かめることへの意欲も起こらなかった。全てがただの気のせいであってくれと英一には思われてならなかった。

「あしもり、先輩……」

恐る恐ると云う調子で漸く累が話し掛けたのはどれだけ時間が経つてのことだろうか。最初英一は自分に呼び掛けられたと云うことも曖昧にしか認識しておらず、もう一度累が呼び掛けて漸く我に返った様に彼は累に向き直った。

「あ、ああ、すまない、……どうしたんだ？」

「いえ。何から言えばいいのかな……その、また、助けてくれてありがとうございました」

「助けた？」

「ここに匿ってくれたじゃないですか」

「……だけど……」

「……那於巴君のことはあたしも同罪です。あいつが最初にあの腐った女みたいなの、《哄笑する女》が出て来てあいつに襲い掛かった時あたし、怖くなって一目散に逃げちゃったんです。だから多分、逃げ切れなくなって……」

「……」

「先輩、それでその……瀬之川先輩と喧嘩、されたんですよね」

「あ、ああ。俺が、真夜中に月子の偽物を斬った時、そこにいて……」

「偽物、だったんですよね」

「……きつと、間違いなく、多分、そうだ。そうだよ」

「試す様なことを言ってますみません。瀬之川先輩が真夜中にあたしたちを起こして来た後、葦杜先輩が行方不明になってたのも騒がれましたけどその後こちらで西側の廊下を調べたんです。そこに霧海先輩の死体は血痕一つありませんでした」

「えっ？」

「……もしかして自分で信じられなかったんですか、自分が斬ったのが偽物だって。本当に何もなかったんですよ。真つ二つにしたって言ってますがそうなら血の一滴も見つからなかったのはおかしいでしょう？」

「そう……そう、だな」

「だからあたしは、瀬之川先輩には悪いですけどそのことは信じていなかったんです。きつとまた化け物に化かされたんだって」

「……」

「そろそろ行きましょうよ。こんな狭いところにいつまでもいたって何にもなりはしませんから」

累は努めて笑って、明るそうにそう言った。それから二人が何を目にするのかを分かっているように、じつとしていられる性分ではない彼女はそう言わねばならぬと信じたらしかった。英一は漸く一つ頷いて扉の鍵を外し、ゆつくりと外の様子を伺った。開いてすぐ異臭、血と何か別の臭気が混ざり合ったおぞましい匂いが鼻についたが已むを得なかった。二人は半ば義務的に西へ続く廊下を塞ぐ瓦礫の前まで赴いた。そこには原形を留めていない男の死体が無残に放置されていた。その破かれたカッターシャツ、破かれたズボン。……何があったのかは考えるな、と英一は自分に念じた。代わりにただ何もしてやれなかった後輩の為に冥福を祈るほかなかった。

二人はともかく一旦中庭まで戻ったところ、そこで息を潜めていたらしい健と京典が姿を現した。二人の現状認識は累と大差はないらしく、彼らも英一が斬ったと云う月子は偽物だったのだろうと考えていた。兼輔と奏美の二人は上の階へ上がっていたのでおそらく無事だと云う。

「ところで飛井さん、那於巴君はあの様子だと察するところだが、『哄笑する女』が現れる前に彼の存在に気付いて迎えに行った時何か話すが聞こえたが彼は何と言っていたのかね？」

「えっ？ ああ、確か……瑚潑先輩見なかったかって。見てないけどどうしたのって聞いたら、真っ暗闇の中ではぐれたって言ってました」

「何だって？ そう云えば二人は霧海さん共々昨日化け物共が出て来た折以来行方が分からなくなっていたままだったが、これは地下通路にでも迷い込まされたのか」

健が累の答えに深刻な顔をして呟く。そこで京典が疑問の声を上げた。

「そんなことってあるんです？」

「ある」

英一は即座にこれに断言したので京典が懐疑的な視線を投げ掛ける。累も少し驚いた様に見ていた。そこへ健が続ける。

「ああ、この城の一带は謎の力が働いているらしくてな、今まで何度かこう云うことが起こっている。ある時は研究室の学生が、またある時は私自身がいつの間にかあの地下通路のどこも知れぬ場所に放り出されているのだ」

「ええ……？」

「あの、嘉尾さん？ あなたは……仮面をした骸骨を見たことはありませんか？」

「何だね急に？ 私は今のところそんなものを見た覚えはないが……」

「……いえ、何でもありません」

幾ら訳の分からないものに出くわしていると云っても、あの『悪夢憑き』を名乗る亡霊の様な奴について知っている者は限られていた。あの不吉で不条理を感じる存在について何でもべらべら口にすることに対し英一は未だに信じて貰えるとは思えないと云う警戒感を抱いていた。差し当たりここに遭難してより長い筈の健をして知らぬと云うのなら話をややこしくすることもないだろうと考えられた。健は少し訝しげに英一を見たが、敢えて語るつもりもないらしいことを察すると話を変えた。

「ともかくこれ以上犠牲を増やしている訳にも行かない。葦杜君には軽く腹ごしらえをして貰って、その後君の持っている鍵束で宮殿らしき区画の扉を開けるか試してほしい」

「分かりました」

「じゃあ、あたしも行きます」

「……ぼくも行った方がいいですか？」

「うーむ、多洪君はこちらに残っておいてくれ。那於巴君のことをそのままにはしておけんだろう。どんな風になっても、廊下に捨て置かれるままなのは忍びない」

「……分かりました」

英一は手短かに食事を済ませると累を連れて中庭を出た。そして二階まで登ったところで、人影を見る。

「お前……」

「瑚潑じゃないか！」

紹の様子は目立った外傷こそ無かったがお世辞にも元気そうとは言えなかった。おそらく地下通路に放り込まれた都合碌でもない目に遭わされたのは察するところだった。

「大丈夫か？ 中庭まで行けるか？」

「いや……それより葦杜、ツネヒー……、那於巴見なかった？」

「えっ？」

「那於巴……見なかった？」

じりと近付いて、無感情な目で紹は英一に詰問した。その異様さは累が微かに後ずさる程度にはどこかおどろおどろしかった。英一は自身の感情を宥めながら言葉を選んで口にする。

「すまない、さつき化け物が一階に現れてあいつは……殺された」

もしかしたら慎一郎の時同様に激昂して掴み掛られるのではないかと英一は不安を抱いたものだったが、紹は静かに聞いていた。その無表情で何度か瞬きをし、暫く沈黙を続ける。いたたまれない時間があったが、それを止めたのも紹だった。

「そっか。とうとう殺られちゃったか」

「……」

「葦杜、お前次に何すんの？」

「えっ？」

「どっか行こうとしてたんだろ？ 嘉尾さんにお使いの一つでも頼まれてんだろ？ 折角だし、おれも一緒に行くわ」

「え、あ、ああ……でも、腹減ってないか？」

「ああ……そう云えばそだな……」

紹は懷を漁って何かを取り出した。それは一枚のチョコレートだった。彼は包みを開いてそれに齧り付く。無言の、がつがつとした食事に英一も累も何も言えなかった。チョコレートは瞬く間に平らげられた。囁み碎き、ぐぐりと飲み下した紹はどこか場に似つかわしくない笑顔浮かべて言う。

「そういや城壁でお前と別れた後に拾ってたんだよねこれ。ツネヒーと相談してこっそり持ち歩いてたけど、結局一緒には食いそびれちゃったからなあ」

「……」

「ま、そう云うことで。腹ごしらえもしたし、付いて行ってもいいよな？ どーせ中庭にいても出来ることなんて大してありゃしないんだしよ」

彼と云う人物は確かに明るく人当たりの良い男だと彼を知る者たちから見做されており、兼部先が同じでもある累とてそうした付き合い易さからいい先輩だと思っていたものであったが。城内にて再会しての彼の纏っていた雰囲気は常人共々どこか他者を寄せ付けない異様なものであったことから再行していた月子以外誰もがなるべく遠慮気味な態度で彼らに接していたものだ。……ここへ来てこうしたやけに繕った様な明るさを思い抱かせる振る舞いをされては、英一にしろ累にしろどう応じたものか分からなかった。

「おーい、聞いてんだろ？ ほら、どこ行くんだよ？」

「……えーと、三階から更に奥の……」

「あー、あの何か遠目にも立派な感じのどこね。んじやとつとと行こうぜ。行って調べて、おっさんが探してるものを見つけちまおう」

どうにも言い難い雰囲気の人に先導されるようにして英一と累は三階へと上った。開けた空間。風が珍しく少し強い。雨が近いのかもしれないと英一は空を見上げて思った。……足音が南側より近付

いた。それを聞いて最初英一は先に上へ上がっていたと云う兼輔や奏美のものかと思ったのだが、足音は一人のものだった。

「ヤア。ぼクはシマ、せいじろうト同ジ研究室ノ者ダ」

奇妙な喋りをする男が現れた。その風体はと云うと肌の色は白く、体格は太って恰幅が良く眼鏡をしている。頭髪は短い金髪で、これは如何にも西洋人的な姿見をしていた。そう云う男がやけに親し気に、片言の日本語をして三人に話しかけて来るのである。英一は奇怪過ぎるその存在に困惑してどう返すべきか言葉に困った。英一がそんな風になっているのを横目に見た紹がじろと男を見て言う。

「誰、あんた？」

「せいじろう、知らない？ 君たちノ仲間ノ一人だロ？」

「るいちゃん、知ってる？」

「いえ……」

「今、ぼクはちよつと人手が必要なんだ。だから君たちニ協力を頼みたくてネ」

そう言いながらこの男は近付いて来て累の手を掴んだ。やけに自然に、やけに無遠慮に。その流れるような動作に英一や紹どころか累をも一瞬呆氣に取られて反応が遅れた。或いはその肥満気味の姿見からすればもつと鈍くて当然であろうと思われたのであろう。引っ張られた累がその痛みに声を上げた。

「いたっ！！ ちょ、止めて下さい、放して！」

「おいあんた、るいちゃんが嫌がつてるだろ、放せよ」

「そうだぞ、大体俺たちはせいじろうなんて人は知らねえよ！」

「……」

英一は剣の柄に手を掛けた。見れば紹も鉢らしきものを握って男を睨んでいる。男はぎりりと二人を見た。そして叫んだ。

「ぼクラなめるナーーーーッ！！」

そう叫ぶと驚くべき速さで累を引っ張りながら男は駆け出し、瞬く間に尖塔を登って行く。英一は紹を見た。実に一拍ほど紹は遅れて英一を見た。その奇妙な一瞬を英一は一分程度には長く感じたものだ。紹が言った。

「るいちゃん、助けるんだろ」

「ああ！」

「いいよ、行こう」

二人は走り出し、全力で尖塔の階段を登った。あの男と同じ尖塔を登った筈なのだが上に見えるであろう男の足音は既に遙かに遠く五階まで達しつつあった。ふざけんなど内心で悪態を吐きながら英一は息を切らすことも構わずに螺旋階段を登る。二人は五階まで走り抜けたが、五階出てすぐの周囲には男の姿が見られず、英一は東、紹は西に分かれて両側のトーチカを調べ、最後に南北から中央の廊下へ躍り込んだ。

「どっちだ！」

「そっちは閉まってた筈だ！」

「じゃあこっちか！」

二人は東の部屋を開いた。殆ど蹴り開けるような勢いで扉は開かれ、中へ飛び込む。……英一が前に見たのと寸分違わぬもぬけの殻のままの部屋があった。どう云うことだ、と英一は焦った。

「ここじゃねーのか」

「じゃあどこに……！？」

いた。

「飛井さん！」

「遅かったネ。これからイイとコなんだ。邪魔しないデ貰おうカナ」

ガン、と音が響いたと思うと鉄格子らしきものが下りて英一と男の間を遮った。英一は鉄格子に齧り付いたがびくともしない。続いた紹が同じく組み付くもどうにか出来るものではなかった。

「先輩、助けて、たす、け、て……！！」

奥で累の悲痛な声が聞こえた。……男が鼻歌を鳴らしながら服を破き剥ぎ取る音が聞こえ、それから二人の目の前で筆舌に尽くし難い光景が繰り広げられた。泣き叫ぶ彼女の悲鳴に最初英一は悔しうにしながら鉄格子が外れまいか無駄な努力を払ったものだが、持ち合わせた剣でもびくともしないそれを前に試す術を失い、片面がなまくと化して無駄を悟るにつれただ見ていることしか出来なくなった。その心の内では後輩に対する申し訳なさから謝罪の言葉が弱々しく出て来たものだが、男はそうした負け犬の詫び言を聞くにつれむしろ勢い付いているかに思われた。……累が泣き疲れたのかもはやえづく様な声しか上げなくなった辺りで男はその首にご機嫌で手を伸ばし、苦悶に断末魔の、最後の助けを切望する微かな求めが聞かれたが英一にも紹にも今や鉄格子らしきものを揺らす意欲すら諦められており、か細く小さく縮れていったその声は何かがぐぎりと折れる音がしたのと共に消えた。英一はがっくりと膝を折って座り込んだ。眼前の凄絶な光景を見ることも目を離すことも赦し難い罪であるようにしか思われず、その板挟みによって心が折れかかっていた。傍らの紹はどこか淡々としていた。無力に打ちひしがれるともなしに、ただ現実が変わらないことを無感動に直視しているだけの様に思われた。

「グヒュ、グジュツ、ツギハ、キミタチダあ……！！」

ぶくぶくと音を立てて男が変異し、癌細胞の暴走を起こした様な醜い膨れ上がり方をした姿に変わった。この余りに醜悪なものを前に英一は尚も放心していた。……紹が英一を見た。そして頭を振った。その顔には諦めが映った。ばきりと男が鉄格子らしきものをへし曲げ、外に出た。その手がどこか緩慢に英一の頭に伸びる。がしりと掴まれ激しい痛覚に襲われている筈の英一はしかしまともに対応せず抵抗もしなかった。男が奇声を上げた。愉快であるらしい。

「ヘエ、ジャア、オノゾミドオリ、殺シテアゲルヨお！！」

突然に、鋭い音が響いた。それは銃声だった。紹がまるでそれによって目が覚めたように男を見上げた。男の頭に風穴が出来て、どこか茶色い血が流れ出た。男は痙攣し、微かに自らの死に抵抗しようとしたかに見えたがやがて脱力し、英一を手放して仰向けに倒れた。うるさい音が響いた。それから静かになった辺りに、足音が生き残った彼らの後ろより近付く。

「葦杜」

游次郎が静かな、しかしよく通る声で英一を呼んだ。英一は男の手から解放されて床に臥せていた。彼は尚も何も言わずにただぼうつとしていた。英一の傍らに来た游次郎はそんな彼を見て、次に紹を見た。紹はどこか信じられないものを見たかのように游次郎を眺め上げている。彼は言葉に詰まっているらしかった。それで游次郎は紹については何も言わず、屈みこんで英一を首元から引っ張り上げた。

「おい、葦杜！！」

その鋭い声は英一の意識を眼前に戻させた。自分が後ろから掴まれていると今更の様に気付いて振り返り、やはり遅まきに游次郎を見やる。游次郎はそこへ張り手を叩き込んだ。ばちんと音がした。

「お前、死ぬ気だったんだろ！ 殺されるに任せるつもりだったんだろ！！」

「ま……正雁せん、ばい……」

またもう一発游次郎は英一の頬面を引っ叩いた。どう云う訳か漸くそこで英一は自分が彼に叩かれて、痛覚が悲鳴を上げている事実を意識が行き着いた。

「痛い、痛いです、何をするんですか！」

「五月蠅い、黙れ！ 俺は前に言ったよな、『どうしようもないことを確かめない限り諦めるな』って！ 忘れたのか！！」

「でも、でも、飛井さんが……とびい、さんが……」

「黙れ！ 助けられなかったから自分も死のうなんて自己満足、金輪際考えるな大馬鹿がつ！！」

今度は平手ではなく鉄拳で游次郎は英一を殴った。この人はこんなに感情的で暴力的だったものだろうか、とどこか場違いなことを英一は考える。それを眺める紹はどこかぼんやりとしていて、一つ彼は呟いた。羨ましいな、と。英一とこれを折檻する游次郎には聞かれなかった。

少しだけ落ち着いたらしい両者は立ち上がり、釣られる様にして紹も立ち上がった。男の醜惡な亡骸からは異臭が立ち込め、今すぐここから出たいと思うところだったが奥の長机の上で息絶えている、あられもない姿の累をやはりそのままにしておくことは出来かねた。それで後味の悪いことだが（初佳の時と同じ様に）集められる故人のものを集めつつ隠すべきところを覆い隠し、英一がやはり累の亡骸を抱え上げた。紹は敢えて自分がやろうとは言い出さなかったが、ふと彼は辺りを見回して何かに気付いたように部屋の中へ歩き、小さな謎めいた塊を掴んで戻って来た。

「これさ、嘉尾のおっさんが言ってたやつじゃねーかな。一応持つて行くわ」

紹がそうすることを止める理由を英一は持たず、事情をまだ知らないらしい游次郎も敢えてこの場で問答を行おうと云うつもりもなかった。五階から一階まで降りるのは全くの骨だが英一は何もその苦を感じず、ただ死なせてしまったこの後輩を悼み、また既に先逝く立場となった顔触れを思い出して沈痛な無念を抱くだけだった。初佳にしろ累にしろどうしてこんな、余りに惨たらしい死に目を晒す羽目になるのだろうか。男共の本能的な欲望がかくも彼女らを穢すものなら、自分もまたいずれはこの様になるのか。この心身ともに化け物の存在として、次は奏美や月子を穢すのか！ 彼の沈んだ心の中でこんな、虚空に叫ぶ様な憤怒が思い抱かれたがそれをおくびに出すことはなかった。その余裕すら彼の心にはなかったのだから。英一は葬列そのものの姿で降りる。游次郎は静かに、紹は淡々とこれに続いた。

中庭では常人の埋葬を終えて一休みしていたらしい健と京典が待っていて、この二人はまた知った顔が無残な最期を遂げたことに痛ましい思いをさせられなければならないかった。そこに丁度二つの足音が中庭に戻った。

「お前ら、そいつは……」

兼輔が奏美を伴って帰って来ていた。二人はこれまで開かれた部屋の総ざらいをして取りこぼしや見落としがなかったかを確認しに出ていた。結局その成果は芳しくないまま戻り支度をしたところで階段を下りる音が下から聞こえたと云うことなので追って来たと云うことだった。尤も、奏美は兼輔の後ろに隠れながら英一を恐る恐る見ている。この怯えが二人の歩みを遅らせたことは間違いなかった。

「すみません。また……死なせてしまいました。飛井さんが今度は、犠牲に……」

「そんな……」

息を呑むような声を奏美は上げた。英一は彼女を慮って累の亡骸をゆつくりと地に置き、自らは後ずさって枯れ木の影に隠れた。尚もどこか不安そうにする奏美にどうも辛抱堪らんと云う調子で京典が言う。

「瀬之川先輩、霧海先輩のことは一旦置いてあげて下さいよ。ぼくたちもうこれだけしかいないんですよ。みんな死んじゃったんだ……この場に遺体を埋められていないこ、……名賀搗さんと、あと……し、もと、先輩とを除いて。ここだけでもう三人、外で四人も死んでるのに今更仲間割れなんかしている場合ですか？」

「ぬう、いや、多洪君、瀬之川さんにも彼女の気持ちがある、あまり責めないでやってくれ」

「……いいんです、わたしが悪かったですから」

奏美はそう言って累の元に跪いて丁寧にその冥福を祈った。……思えば追道学園美術部の遭難者も結構な数の女性陣がいた筈だったのが最早この奏美と生死不明の月子しかいなくなっていた。怪物に立ち向かいそれ故に最初の犠牲者となった小春、無残にも喰われて骸も残らない百香、女性として最も残酷な最期を強いられた初佳と累、未だ亡骸さえ空の下に放置されたままの由海。この上無事であるとはとても思えない月子の行方が知れぬままとなって取り残された奏美の顔は耐え難いまでの悲しみを映していた。涙を流さぬのは氣丈故か、もはや涸れ果てたがためか。沈んだ空気が辺りを覆う中、紹はちらと俯いている游次郎を見、何事か耳打ちした。それで游次郎は氣を取り直したように態度を正して健の方へと赴いて彼に挨拶をした。教授にとってはおそらくこの面々で最後の新顔となる彼のことを健は奏美の邪魔をしない程度に静かに歓迎した。

累もまた中庭に葬られ、改めて今後の話が持たれた。五階まで登った結果が彼女の死だけではあまりに救いのないところだが、紹が持つて来た物体を見た健は直ぐに持つている資料と照合してそれが必要な部品であることを認め、五階に登った面々を労った。それで累が生き返る訳でもないとは云え、この一帯からの脱出と云う大目的に即してはちゃんとした結果と言えた。では本来英一たちが向かう予定だった城の最奥となる宮殿区画に今度こそ、と云う段になって突然地震が起こった。地面に伏せて揺れが収まるまでやり過ごす。幸いその揺れはあまり強くなくこの古城がそのまま崩壊すると云う最悪の結果を招くことこそなかった為皆起き上がって安堵したもののだが、更にまた今度は地鳴りがした。

「何だ？ 段々近付いて来るぞ……？」

兼輔がそう言いつつ視線を中庭を覗く窓に振り向けた。一階や二階を取り囲む窓は廊下に面していないが故にそこからは何も確かめられなかったが、地鳴りは廊下を伝って段々中庭に向かっていくことはどこか感じ取られた。そこに否応なく危険の予兆を感じ取った英一が素早く中庭の入り口に張り込み、游次郎と兼輔が続く。紹も来ようとしたが兼輔が他を守れと指示を与えたことで彼は残った。……入口との間の中途半端な距離に京典が残っていた。運動神経に秀でていると云うでもない彼は右往左往していて、兼輔に離れるよう促されるのに氣付いて漸く入り口から離れようとした。その時に地鳴りの主は辿り着いたのだ。

「アア……アシ、モリ……」

いったいこれは何だと英一は思った。その図体は成体の熊を更に一回り大きくしたようなものだが全身が毛ではなくもつと太くうねうねとしたもの、昔見たアニメ映画に出て来た猪の怪物から生えていた様な触手がその体を覆い尽くしている様に見えたのだった。それが何故か人語らしきものを発し、あまつさえ自分を呼んでいる？ ふと英一は思い出す。謎めいた地下空間、歴史を描いたと思しき埋もれた絵画の部屋の中で慎一郎と出会い、彼の絶望の叫びを目の当たりにしたことを。

「まさかお前……いいん、和家なのか……？」

この問いは当然と云うべきか周囲から何を言っているんだと云う怪訝な顔を向けられたものだが、この眼前の怪物はそれに応じる様に答える。

「アシモリ……オマエノ……オマエラノセイデ……モモカハ……アア……アアアアア……」

その淀んだ声を聞くにつれ京典ははっと相手を見る。彼は英一と同じ推量を覚えたらしかった。

「その声もしかして、葦杜先輩の言う通り和家先輩じゃないですか!？」

「……あ、そう云えば何となくあいつの声に似ている気がするな」

游次郎、次いで紹が納得した様に頷く。兼輔や健は直接面識がない上これまでの経緯でわざわざ言及されなかった相手であったが為に未だ困惑していたがどうやら彼らの仲間らしいことは理解した様



子だった。……奏美は怯えていた。見知った筈の声を発するのが化け物であると云う事実はそうさせるのに十分だろう。

「一体、どうして……どうして和家くんがこんな姿になるって言うの？」

「ウウウ……ウルサイ！！」

その一喝は辺りを揺るがすかに思われるほど大きく、面々は思わず耳を塞ぐ程だった。怪物はその腕を英一に伸ばした。慌てて英一はこれを避ける。怪物は憎々し気に舌打ちした。

「オマエノセイデ、オマエヲセイデ！ ダレモモモカヲタスケテクレナカッタ！ ダカラシンダ！ シンダンダ！」

「何言ってるんだお前！？」

「ボクハ……ミタゾ。モモカガシヌノヲ！ アシモリ、オマエトセノカワガヒキアゲナカッタセイデ シンダノヲツ！！」

次に振るわれた腕は速く、英一は避け切れず両腕でこれを庇ったのだがそのまま弾き飛ばされて地を転がった。何て力だと痛みに耐えながら英一は吐き捨てた。……周囲はその暴力から遂にこれを敵と見做さざるを得ず兼輔が掛かって行くのを号令として男たちが攻撃に出た。これまでの化け物共であれば何を仕掛けようが碌な効果がなかったものだが、この慎一郎のなれの果てらしきものにはそうでもないらしかった。兼輔が錆びた槍を腕に突き刺すと触手が千切れ、肉を裂く音と共に淀んだ色の血が飛び散った。その手応えは彼やそれを見ていた者らに自信を付けさせた。銃声が鳴り、もう片方の腕に弾丸が突き刺さる。よろめくそれに紹は懷へ飛び込んで鋏を突き立てた。

「みんな、何してるんだよ、和家先輩を殺す気かよ……！！？」

京典だけは強張った態度でこれに与しなかった。そこにはこの場の面々が半ば投げ捨てているものがまだ残っていた。彼はこの副部長と入部以来仲が良く、よくよく世話を焼いて貰っていたものだった。……怪物は唸り声を上げて組み付く面々を振り払った。しかし明らかに消耗している。この勢いなら倒せる、と漸く立ち上がって戻った英一は感じた。同時に彼を倒す、彼を殺さねばならぬことへの罪悪感がちくりと良心を突き刺すのを感じた。しかし少なくとも彼と奏美に限っては、明らかに憎悪の標的なのだ。その為に殺されると云うのならば自衛を、正当防衛をせねばなるまい。そう云う風に自己弁護がまだ可能な立場だったものだった。

「やめろよこんなこと、こんな姿になっても、こんなになってもこの人は和家先輩なんだぞ！？」

彼にしてはあまりにも果敢に、再びこの怪物を取り囲んでその首を取る構えを見せる面々に対し京典は立ちはだかった。この怪物を庇うように立つ彼に紹がそれこそ舌打ちをしながら言う。

「おい多洪、そこどけよ。そいつを庇っても何にもならねーぞ」

「瑚潑先輩こそ止めろよ、何でそう躊躇いもなく殺そうとするんだよ？」

「うるせーな……おれあ一応な、助かりたくてやってるんだ。そいつに好き勝手されたらなんか恨まれてるらしい葦杜と瀬之川さん殺られるじゃん、お前の言う通り今また誰か欠けて俺らに得があんのか？」

「そうだけど、それが和家先輩を殺すことを正当化する筈がないだろ！？」

「お前な……そいつはただのバケモンだ。この城の一带に徘徊している連中の同類だ。殺れるなら殺らないとおれらが死ぬんだよ」

酷薄な言だった。凡そ京典が知っている様な紹の言動とはかけ離れた、無機的で淡々としたもの。今の彼なら別にこの怪物が慎一郎の姿をしていたとしても同じ様に殺しに掛かるであろうと思われた。何も守るべきものも何も信じるべきものを持たないが仮初めにもここから生きて脱出すると云う半ば惰性の動機を達成する為だけにそう言っているのではないか、とこれを見る英一には思われる。

「グウウ……オオシブ、オマエハ……」

怪物が呻いて腕を動かす。それを見て兼輔が京典に逃げろと叫んだが彼は恐懼故か思考の硬直故か足を動かさなかった。……そのもじゃもじゃとした手は京典の頭を覆い、しかしぬるぬるとした音を立てつつ横に動かされるだけだった。撫でる動作。些か周囲が呆氣に取られる。確かにそれは相手を認識していることの証左だった。当の京典は視界が半ば塞がって困惑していた。

「な、やっ、止めて下さい、何だこれ、気持ち悪い」

「オアメダケハホントウニ……ヤサシイ、ヤツダナ……。ヒトリデズツト、マツクラヤミノウチニ……ボクハイタ。ダレモイナイ、ヤミノナカ……。ハラモヘツタシノドモカワイタ。ダレモ、ヨビカケニコタエテナンカクレナカツタンダ……アア……」

それは泣いているかの様に思われた。うずくまるようにして怪物は言葉を重ねた。敵意が消えたと言うべきなのか、めいめいは判断しかねていたがこのまま攻めると云うのも具合が悪い様に思われ様子を見ていた。紹だけは無感動な瞳をして怪物を見ていたものだが。

「何トマア、女々シイコトヨ。ソレデハ何物足レモスマイ」

空から声が聞こえた。その声を聞いて直ぐにこれを見上げたのは英一と游次郎だけだった。そもそもどうして真上の空から声が聞こえる等と云うことがあろう？ ……《悪夢憑き》が音もなく滞空し、びつと怪物を指さした。その様子は珍しく不愉快気に映った。

「悪夢が悪夢ニ吞マレルナド滑稽、愚図ノ極ミゾ。ナラバ精々、コノ地ニ還リ肉体ノ枷ナキ魂トシテ彷徨イ永遠ニ凡テヲ嘆キ続ケルガ良カロウ」

鋭い薄紫の光が放たれ、怪物を直撃した。途端に怪物は膨れ上がって行く。

「離れろ！」

誰が言ったか、或いは誰もが言ったか。英一たちは急いで怪物から離れた。正にこうした反応から遅れたのが京典だった。輝きを増すその怪物を振り返り、ただ呆然と口を開けてそれを見上げていたのだった。――低い音がし、何かが爆ぜた。辺りに異臭のする肉片が飛び散って中庭を汚した。またそれに伴う土煙が上がって中庭一帯は視界が塞がれた。暫く時間が経って漸く英一は煙が収まってきたのを見、状況を確認する。同じ様に立ち上がって辺りを伺う姿が幾つとなしに見られた。それで英一は怪物がいた場所に視界を向けた。そこには地の窪みと炸裂したものが散らばっていた。その手前に黒い血溜まりの様なものがあつた。

「また……」

英一は言葉を続けずそこへと歩いた。途上何かを蹴ったのを感じ、それを拾い上げる。京典が掛けていた眼鏡だった。レンズの壊れ、構造もひしゃげた無残な遺物。それだけが彼の遺品となった。固く彼はこれを握った。

「ノウ……愉快シデ貰エオルカ？」

後ろからぞくりとする声があった。振り返ると背後に《悪夢憑き》がいた。

「こいつ、葦杜から離れろ！！」

ふっと《悪夢憑き》が視界から横滑りする。游次郎が体当たりを掛けてこれを追い払おうとしたのだ。……辺りから他の面々の声がする。彼らもまたこの化け物が見えていた。むしろ見える様に遂に現れたと云うところだった。《悪夢憑き》はまたふわりと宙に浮かんだ。

「オオ、愉快ナ。生者ノ盛り猛ル様ハコノ死セル都ニ催サルル祭典ノ如シ。愉快ト云フズシテ何トスルカ」

「あいつ、何なんだ？」

「あれは……《悪夢憑き》だってさ。そう前に名乗って来た」

「名乗って来た？ そう云えば以前君は、仮面をした骸骨を見たかと言っていたか、まさかこいつと以前会ったことがあったと？」

「ええ。言っても信じて貰えないかと思っていたから黙っていました」

何気もなく英一はそう言ったものだが、その一言に彼をまじまじと奏美は見た。尤も、それは全員を瞥見する《悪夢憑き》以外誰にも気付かなかったのだが。《悪夢憑き》はケタケタと嗤って言う。

「我ノ名ハ敢エテ名乗ルナラソウナロウガ、ソシテコトハ些末事ヨ。ソノ若者ニモ言ウタガ、我ハ道化、悪夢ノ機構トシテソノ役目ヲ務ムルノミ。故ニコソオマエタチヲ時ニ追イ詰メル。コノ地ニ満チル悪夢ノ糧トナルカ、悪夢ソノモノト成ランコトヲ望ミテナ」

「それが……俺らをこんな目に遭わせる理由かよ、ここまで散々な目に遭わせて来た理由かよ!？」

「オヤ、全テガ我ノ手繰ル糸ダトデモ? マア、放ッテオイテモイズレハ飢エニ滅ビル故、捨テ置クノモ一興ナガラ……ヤハリ活キノ良イ生者ノ絶望ガ描ク色コソハコノ地ニ相応シク映ル故ナ」

「我々は、お前の玩具ではない。お前の思う通りになると思うな」

「フフ、正ニソウアツテクレルコトコソト云ウモノ。是非ニモ、ソノ遺物ヲシテ脱セルカ試ミテミヨ。コノ城ノ、コノ地ニ満チル悪夢ノ手ヲ払イ除ケラレルカヤツテミヨ。ソシテソノ為ニ希望ヲ抱キ……ソノ為ニ死セヨ。カクテ我ト共ニ踊ルガ良カロウ……」

《悪夢憑き》は尚もケタケタと嗤って、風に乗る様に浮き上がって消えてしまった。……英一は言われたことを咀嚼して思うのだ。つまり、自分たちは分かかって尚必死に抗う為に戦わねばならないのだ。あれはそうしたこちらの努力を上から物見の如く見下ろして嗤い、その為にまた誰かが死に至り遂には全滅することを期待しているものだ。敢えて出て来たのは殊更こちらを團結させる為と云う訳で、実にたちの悪い心配りな訳である。彼は未だその手の内にある眼鏡を今一度見、ゆっくりと歩いて他の死者が埋葬されているところの隣にそっと置いた。墓穴一つ掘れない死に目を迎えた後輩がせめても寂しくない様に。……もし、慎一郎の遺品の一つもあればとも思ったが何もなかった。何も残さず死んだと云う他ない彼。好きだけ恨んでいいから、ただ今だけは安らかに眠っていてくれと英一は願いを掛けた。……こんな様子を、奏美は遠巻きにして見ていた。周囲が中庭の惨状を片付けている中で震える脚のままにして。